

会員研究

甲州・海岸寺

清水 漠

【名刹】

山梨県（甲斐国）は、海なし県である。それなのに、海に因んだ「海岸」という名前の寺が存在する。「海岸寺」は、山梨県北杜市須玉町上津金にあり、寺名に反して海拔1,000メートルの山奥にある。寺の傍らを、甲州と信州を結んだ昔の「佐久往還」が走るが、今は、人・車の往来は少なく静かな旧道となっている。

【縁起】同寺の説明書によれば、今より約千三百年前の養老年間に、行基菩薩が庵をかまえられたのが、寺の始まりといわれる。行基菩薩は、土木工事や農業技術を伝えるとともに「千手千眼観世音像」二体を彫り、その一体を、海岸寺に祀り本尊にしたという。

【寺名】海岸寺という寺名の由来は二説ある。一つは、太古、今の甲府盆地を中心に近接する丘陵地帯を含めて、「大湖水（海）」があつたと言う伝承があり、その岸

辺がこの寺近くまであつた。その大湖水を想像してこの寺の境内に立ち、目の前に展ける南アルプスの壮大なパノラマの眺めから「海岸寺」と命名したと。もう一つは、新華嚴経中の「観世音の本所、補陀落山（ふだらくさん）は天竺南海中にあり」を訳して、「海岸孤絶山」というのに依ると言う説。この説が寺名の由来であると。

【庇護】十一世紀終わり頃の寛治年間、常陸国武田郷から甲斐国に渡ってきた甲斐源氏の祖・新羅三郎義光、義清が、深く帰依して一族の鎮護・繁栄のため、多くの寺領を奉納し供華を怠らなかつたという。つまりこの頃より、武田氏が庇護した寺となつた。

【開祖】六百年程前の応安年間（一二六八〜一三七五）に、鎌倉建長寺より、石室善政和尚が招かれて、律宗から臨済宗に改め、海岸寺の始まりとした。甲斐源氏誕生以来、永い間武田一族の庇護

を受けていた名刹である。現在宗派は、臨済宗妙心寺派に属する。

【焼失】天正十年（一五八二）織田信長・信忠軍により、戦国最大の領国であつた武田領は、解体され武田氏は滅亡した。同時に、武田氏と縁の深かつたこの寺は、織田軍の乱妨を受け本堂他兵火により焼失した。

【再興】然しながら、翌天正十一年には、徳川家康が寺領を寄進し再興を命じた。さらに家康は、慶長年間に「天下安寧の祈願所」とし、寺領を更に寄進し庇護を続けた。

現在の本堂は、十七世紀半ばすぎ、海岸寺中興の祖と言われる即応宗智和尚が本堂等を再建し、現在に至つている。尚、現在の本尊は、行基菩薩作の千手千眼観音像ではなく「釈迦牟尼如来像」である。

【御詠歌】海岸寺は、甲斐三十三番・第十三番札所であり、また、「甲斐百八霊場・七十一番札所」でもある。御詠歌は、「補陀落は余所にはあらず 津金なる 大悲も深き 海の岸寺」。

【境内】寺の案内書には、「境内をいろどる春の桜、新緑の初夏のかわり、楚々とした野草の咲き

だれる夏、絢爛の錦につつまれる秋、深い雪にこもる冬の堂宇など四季それぞれの風情をもつて、訪れる人の心を禅の境地にいざなってくれる」と。又「古い歴史を物語る長い階段、観音堂、本堂、経堂、鐘楼、仁王門などの七堂伽藍は、周囲の自然に調和し荘重な禅寺のたたずまい」と記されている。

私は、何回も訪れているが、この景色にあつたことはない。ましてや禅の境地にも。

【石仏】

【誕生】海岸寺は、「石仏の寺」である。境内には、約百五十体が整然と安置され、いずれも秀作揃いで、拝する者をして仏土の安らぎを、おのずから感得させるものがある。これら石仏の内四十体ほどを除いて、そのすべては江戸時代文化十一年（1814）から、約十余年を費やして彫られた。約百体余の石仏は、「西国三十三ヶ所・坂東三十三ヶ所・秩父三十四ヶ所合計百体」と延命地藏尊などである。

【十二面観音菩薩像】「聖観音菩薩像」等が多く彫られている。

【貞治仏】作者は、信州高遠の名石仏師・守屋貞治（1765〜

1832)である。守屋貞治は、生涯三百体余の石仏を彫つたといわれ、その約三分の一がこの寺に安置されている。また高遠・建福寺、桂川泉院境内にもある。

貞治は、幼い頃より家族の死と悲しみを味わわねばならなかつた。彼にとつて石塊は、有難い観音菩薩に見えたのであろう。だから彼の彫つた石仏は、端正で優しい顔たちであり、あどけさが残る清らかな少女のようである。単なる路傍の石仏ではなく、石彫仏ともいべき秀麗な技である。香を焚き、経文を唱えながら一心に石仏を彫つたと言われている。

格調の高い石仏の姿は、「木彫の円空仏や木喰仏と並び、美術的価値は高い」と言う人もいる。貞治が生み出した優れた石仏であることに加えて、「野ざらし」であるために、約二百年の歲月が、磨かれた美を観る人に感動をもたらすのであろう。

〔高遠藩〕藩主・内藤氏は、藤原秀郷の末流で、始祖義清が初めて内藤と称し、徳川氏の為に始めから忠勤を尽くし徳川の譜代大名となつた。元禄四年(一六九一)

撰津富田領から移封され、初代は内藤清枚である。以後明治まで内藤氏が、八代一七八年間支配した。

〔石工〕藩財政は厳しく、江戸中期以降、人口増加対策の為、新田の開発が行われ、中央構造線に沿う高遠は、山村で耕地が少なく、新田開発のためには、用水(井筋)工事が必要で、その工事の過程で、「石切技術」が蓄積し、「高遠石切(石工)」が誕生した。冬期間は仕事がなく、必然的に全国各地に出稼ぎが行われた。単に石切仕事でなく、石を彫り「石仏」を作る石工が生まれて来たのも必然である。当初は冬期のみで作間稼ぎであつたが、幕末近い頃になると、本業化し村へ帰りぬ者が多くなり、藩は取締を強化し、石切目付の任命、五人組の組成等で、年貢・諸役の徴収・確保に苦慮した。主な出稼先は、今の山梨県が最大で、静岡県・群馬県・神奈川県等関東地方が多い。

【故郷】

〔滅亡〕天正十年三月、織田軍の攻撃により、武田勝頼・信勝・桂林院殿は自害。ここに戦国大名武田氏は滅亡した。同月二十九日、織田信長は、論功行賞として、旧

領の「知行割」を行い、甲斐国(穴山梅雪の河内領を除く)と信濃諏訪郡を河尻秀隆に与えた。四月に入り、織田信長は甲斐入りし、武田一族の残党狩り、そして武田氏に關係する寺院・神社・祈願所等に対し放火・略奪・寺領没収など織田権力の強化を図つた。その代表的なものが、信玄の墓がある「恵林寺」である。前述の通り、海岸寺も同じ乱妨に遭い焼失した。

武田氏滅亡から八十日後、信長・信忠は、明智光秀の謀反により、本能寺で横死する。織田氏崩壊への道を歩むことになる。同時に、甲斐河内領主穴山梅雪も、京都宇治田原で一揆に襲撃され落命する。

〔混乱〕これ以後旧武田領国をめぐり、徳川・上杉・北条氏が相次いで侵攻を始めた。

天正壬午の乱の勃発である。

最終的には、甲斐国の争奪は、徳川家康と北条氏直との争いになり、北条軍は、甲信国境に大軍を展開し、今の北杜市内各地に、本陣・砦・屋敷・館を設営し、徳川軍を圧倒していた。ところが、戦は意外な展開となり、いくつかの合戦で北条軍は負け、特に地の利を知る甲斐衆(武

田遺臣)、就中「津金衆」の案内を得た徳川軍が、北条軍の補給路遮断をなし勝利に導いた。津金衆の働きに対し家康が論功行賞として、前述の通り海岸寺に寺領を寄進し再興を命じたといわれている。同年十月には、徳川氏と北条氏は和睦し、家康は、三河・遠江・駿河・甲斐・信濃の五か国を領有する大名へととなつた。(天正壬午の乱 終結)

〔故郷〕海岸寺から、車で五分ほど南下すると、我が家が代々保有する山林があり、「陣の下」と呼んでいる。北杜市高根町新町部落から北へ約二キロ・国道百四十一号線沿いにある。この辺一帯は、旭山と呼ばれ、北条軍が、徳川軍と対峙した時、「旭山砦」(北杜市高根町村山北割)が築かれた。

そこから「砦の下」陣の下」と呼ばれたという。私の生家は、車で南西に下る事約五分程であるが現在は、家はない。

〔離郷〕故郷を離れて六十年。父母を亡くして約四十年。墓参又は賃貸中の田畑の契約更新などで、度々帰郷する。その時、時間があれば、海岸寺を何回か訪ねた事がある。車で行き、漫然と本堂

を拝み、石仏を観て帰ってきた。

案内書のような季節に訪れた記憶はない。未熟者ゆえ、禅の境地に浸ることは、無論なかつた。

「再訪」昨年妻を亡くし、今は独り身。今度故郷に帰った時は、じっくり石仏と対面し、少しでも「禅の境地」を味わいたい。

季節は晩春、時刻は雨上がりの夕刻微かに夕日が差す時が良い。

そういえば、「海岸寺は、人の生きていく道を考える所です」と、

この禅的な言葉が記された紙が、寺の仁王門か、本堂の入口に貼ってあったなという記憶が蘇ってきた。



海岸寺の如意輪観音像